

オオサンショウウオ个体登録事業の概要

オオサンショウウオの保全を目指して

日南町役場 住民課

オオサンショウウオが直面する課題

▶ 生息環境の悪化

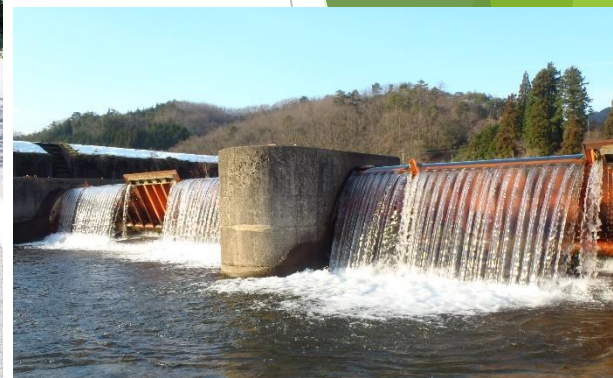
- ・ 河川の分断
- ・ 自然護岸の減少
- ・ 河川の単調化

▶ 外来種

- ・ 交雑
- ・ 競争



3面護岸（神戸川・日南町）



夏日堰（印賀川・日南町）



日南町でもオオサンショウウオは安泰ではない。

生き物を保全するためには？

- ▶ ①その生き物を知る
どこに、どれだけ、どのような状態で
 - ▶ ②対策を立案する
 - ▶ ③実行する
 - ▶ ④検証する
 - ▶ ⑤対策を改善する
- ①～⑤を繰り返し実施することが重要

鳥取県（河川工事前の生息調査）と連携して①から
取り組むことにした。

鳥取県と連携する理由

▶ 日野川及び支流を管理している

→河川環境へ強い影響力を持っている・影響を及ぼしている。

▶ 一定の配慮を行っている

- 河川工事前に生息調査を行っている。

年間調査件数（日南町内）：5～10件

年間捕獲数（日南町内）：30～100個体程度

- 捕獲個体を工事区間から移転放流している。
- 調査区間から3日間連続で捕獲されないことを確認してから工事を実施している。

鳥取県が行う生息調査の課題

▶ 捕獲個体に対してマイクロチップによる個体標識を行っていない。

→ 写真による個体の照合は多大な時間と労力がかかる

▶ 報告書は紙媒体のみ

(電子データで捕獲記録を管理していない。)

→ 保存期限になれば破棄

→ 記録の照合・更新が不可能



データが活用される見込がない

業務報告書



改善策（日南町が鳥取県と連携して実施）

- ▶ 生息調査（県業務）で捕獲されたオオサンショウウオを**個体標識**する。

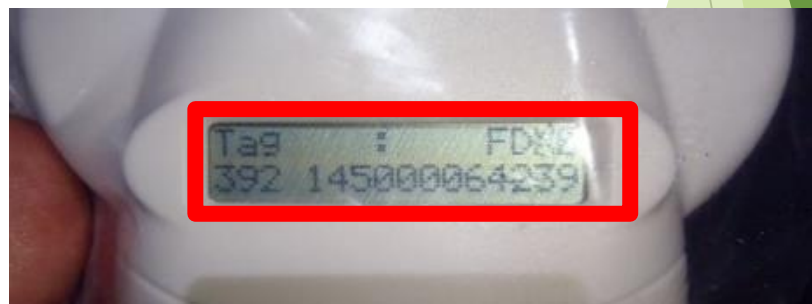
鳥取県が、日南町内での調査業務について発注仕様書を変更したことにより実現した。

- ▶ **電子データ**で捕獲記録を管理する。

Excel形式の記録表、GPSで記録した捕獲・放流位置、写真



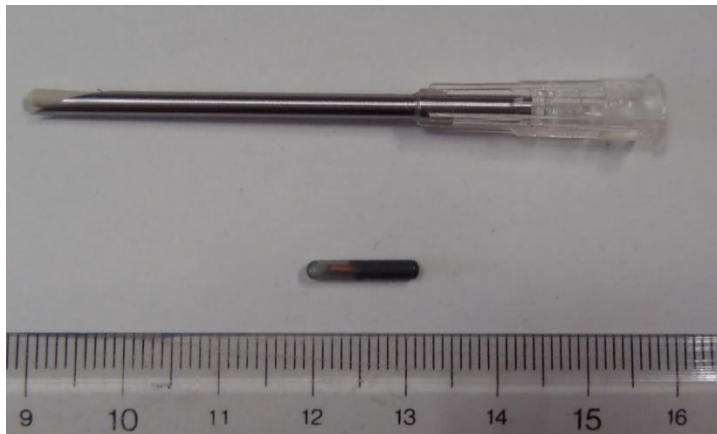
マイクロチップ



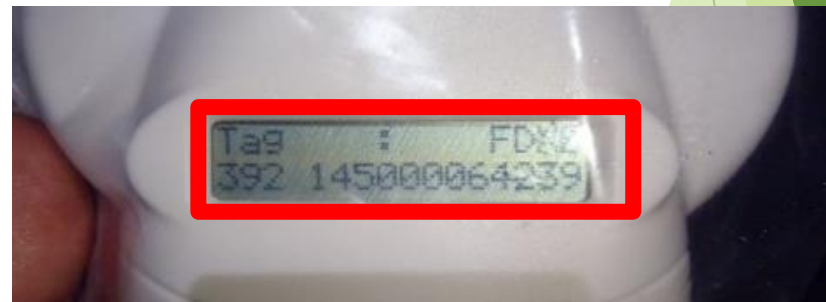
リーダーと標識番号

マイクロチップとは

- ▶ 世界に1つだけの番号が付番されている。
→ 個体の識別が一瞬でできる。
- ▶ 番号は専用のリーダーで読み取る。
- ▶ 半永久的に使用可能。
- ▶ 注射器で個体に挿入する。



マイクロチップ



リーダーと標識番号

鳥取県との連携の仕方

▶ 個体標識の実施

- ・ マイクロチップは町が提供する。
- ・ リーダー、GPSも町が貸し出す。
- ・ 県業務受託者の技術指導は町が行う。

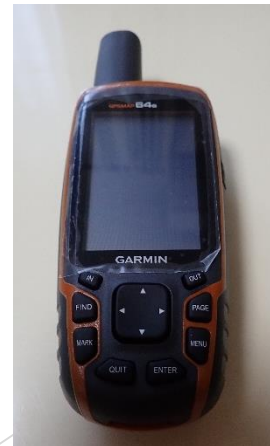
▶ 電子データによる記録の管理

- ・ 県業務受託者は電子データで捕獲記録を提出する。

Excel形式の記録表、GPSで記録した捕獲・放流位置、写真

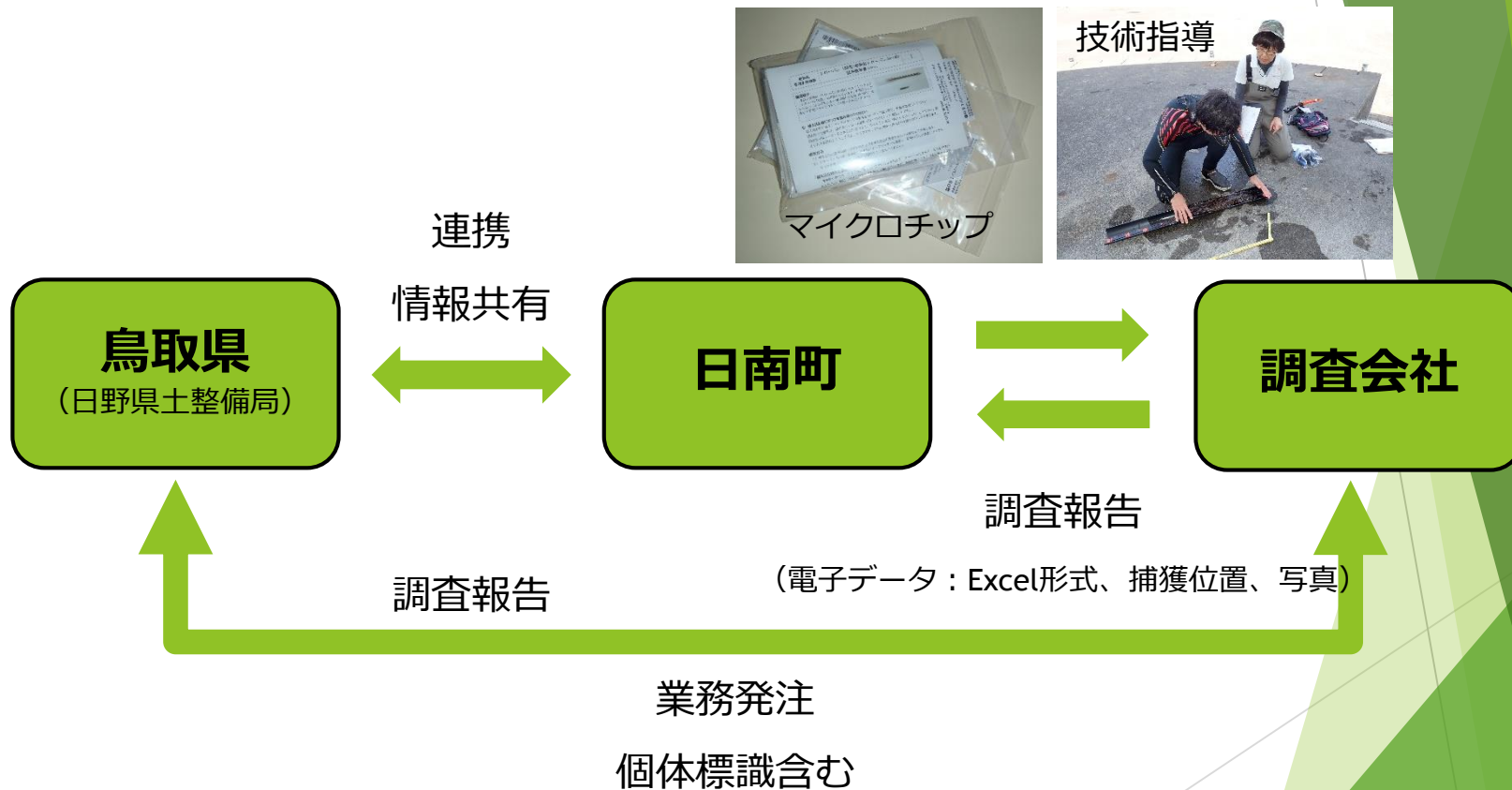


マイクロチップリーダー



GPS

鳥取県との連携体制



費用対効果

▶ 個体標識に係る費用

- ・日南町では、県の生息調査で**年間30～100個体程度**捕獲されている。
- ・マイクロチップの単価は**約1,000円/個**



30,000～100,000円/年程度で全ての捕獲個体にマイクロチップを挿入して、**個体標識**できる。

+ 電子データによる管理

データベースの整備が可能になる。

費用対効果

取組み	効果	費用（コスト）
個体標識	個体の識別が可能になる	マイクロチップ:10万円/年 リーダー:15万円/個 GPS:10万円/個 注射器:400円/個 調査会社の指導が必要
電子媒体による記録の管理	記録の管理・検証が可能になる	

データベース化

保全策の立案、事業実施前の配慮が可能に

個体登録を推進するための課題と対策

▶ 鳥取県と日南町の情報共有・連携

必要な情報（マニュアル必須項目）とデータ形式（電子）
についての合意

▶ 役場内（教育課と住民課）の連携

目的、ルール（役割、手順など）の明文化（要綱）

▶ 調査会社との連携

町（教育課、住民課）と調査会社の打合せの実施

▶ 調査会社の指導体制

町職員を対象にした調査演習の実施
調査演習を受けた職員による指導

日南町で個体登録に取り組むことの意義

日南町にはオオサンショウウオが繁殖できる河川環境が多く残されている。



人工巢穴で卵を守るオス



日野川源流域

▶ **下流部に比べて良好な生育環境が残っているため、保全効果が高い。**

→ 下流域への個体の供給源。

▶ **全国的なモデルケースになりうる。**

全国的に希少だが、地域的によく見られる種は、危機的状況に比べて保全対策が実施されにくい。